



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	〈現場の声〉から学ぶ観光の本質：巻頭言に代えて
Author(s)	山村, 高淑
Citation	CATS 叢書, 14, i-ii
Issue Date	2021-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/81465
Type	other
File Information	CATS14_color_Part0.pdf



〈現場の声〉から学ぶ観光の本質

——巻頭言に代えて

山村 高淑

北海道大学観光学高等研究センター センター長／教授

本書は、北海道大学観光学高等研究センターが2020年12月から2021年1月にかけてオンラインで開催した、全5回の公開講座『観光現場の挑戦』の講義録です。まずご登壇頂きましたゲスト講師の皆様に、主催者を代表いたしまして厚く御礼申し上げます。

さて、2019年に始まる新型コロナウイルス感染症の世界的流行（パンデミック）は、世界中の観光現場に未曾有の打撃を与えました。それまでの、入込客数を増やすことで地域に落ちる経済的利益を最大化していこうという観光開発戦略が、大きな見直しを迫られることになったのです。経済的利益を達成するために敢えて見て見ぬふりをしてきた、いわゆるオーバーツーリズム（地域の環境的・社会的許容度を越えた観光活動）による弊害が、新型コロナウイルスの流行によって、命にかかわる問題として目の前に突き付けられたと言っても過言ではありません。さらに言えば、観光分野にとどまらず、人の移動や人口密度など、日々の生活のあり方そのものの再考も迫られています。観光を含めた〈持続可能な人間生活のあり方〉が根本的に問われているわけです。

誤解を恐れずに言えば、こうした状況の中、私たちが考えなければならない本質的論点は、おそらく、〈有限な地球環境の中で人類が安全且つ持続的に暮らしていくための適正規模〉とはどのあたりにあるのだろうか、という命題に集約されます。言い方を変えれば、居住・労働・移動等といった生活様式の適正規模はどのあたりにあり、産業の適正規模はどのあたりにあるのか？そして、どのようにそうした適正規模へ向けた変革を実行し、持続可能な人類の暮らしを担保できるのか？……こうした命題です。そしてこうした命題に取り組むうえでは、私たちは、私たちが今生きている、〈暮らしの場〉としての〈地域〉を核として捉え直したうえで、〈生活者〉としての私たち自身の手で、持続可能なシステムを構築していくことが必須となります。

これを観光現場に当てはめて具体的に考えれば、それは、例えば次のような課題として挙げられるでしょう。すなわち、観光スポットやアトラクションの多様化・分散化、環境や社会へのインパクトの少ない小規模・高収益で且つ持続可能な産業構造への転換、特定の国や地域といったマーケットへの過剰な依存からリスクの分散へ、最重要市場としての地元・近隣地域の再評価、単なる商取引としての観光交流から信頼構築の仕組みとしての観光交流

へのシフト、等といった課題です。

2006年の設立以来、私ども北海道大学観光学高等研究センターは、コミュニティ・ベースド・ツーリズムに関する研究と実践を、地域の観光現場の皆様との共同研究の形で継続して参りました。具体的には、北海道を中心に日本各地の観光現場の最前線で先駆的取組みをなさっている実務家の皆様と一緒に、21世紀の地域社会が抱える様々な課題の解決に、観光という仕組みがどのように貢献できるのか、理論的・実践的な研究・教育に取り組んで参りました。こうした実務家の皆様は、私どもセンターのスタッフにとって、実践的研究のパートナーであると同時に、様々な現場の知識をご教授下さる先生でもあります。

今回の公開講座は、上述したような命題・課題が社会的にも大きく注目されるコロナ禍の今だからこそ、こうした観光現場の第一人者である皆様がゲスト講師としてお招きし、あらためて現場でのご経験、ご苦悩、未来への思いに真摯に耳を傾け、〈現場の声〉を通して観光の本質・課題・可能性についてじっくりと考えてみたい、という趣旨で企画されたものです。

本書は、そうした〈現場の声〉を講義録として残し、広く一般に公開することで、読者諸賢が今後の観光のあり方を考えるうえでの一助となれば、という思いで編集を行いました。お手に取って、あるいはオンラインにて、ご高覧賜りましたら幸いです。

なお、今回の公開講座はオンライン（ウェビナー）形式で開催致しました。弊センターと致しましては、これが初の、オンラインでの公開講座開催の試みでありました。様々な試行錯誤がございましたが、日本全国のみならず海外からもご聴講頂くことができたのは、スタッフにとって大きな喜びでありました。ご聴講を頂いた皆様、本当に有難うございました。

オンライン開催は、弊センターのように規模の小さな組織でもできることがあること、地域の皆さんと大学との協働のあり方の幅を広げることができること、を私たちに教えてくれたように思います。今後もこうした取り組みを継続して参りたいと思います。引き続きのご支援を何卒宜しくお願い申し上げます。

2021年3月1日